

おわりに

「ワークショップと評価基準」

アンケートを含め感想をいろいろ聞くと、事前に「いい川」「いい川づくり」の評価基準を明確にしてほしいという声がかなりある。公開審査である以上当然の要求と思うし気持ちも分かる。実行委員会でもずいぶん議論してきたが、誰しもが納得のいく客観的な基準を作ることはできなかった。

そのことで多少混乱を招いたかもしれないことはお詫びしなければならないと思っている。しかし、基準がないから公開審査型のワークショップをやっているのではないか、基準が確立するころにはワークショップの意義も終わるのではないか、そのように考えている。それでも2年目で枠組みは見えてきたように思う。

「いい川づくり」には大きく分ければ、プロセス面と成果面がある。従来はいわゆる土木屋を中心に、市民参加やパートナーシップなどのプロセスを重視すると成果物の水準に影響する、といった危惧のあったように思う。実際そのような事例もかつてあったことはいなめない。しかし今回の応募事例を見ると、プロセスに費やしたエネルギーがそれなりに成果を上げているそのような事例がかなり増えてきたように思う。ソフトとハードの統一、環境と参加の一体化、まだどこをどうすればそうなるのかといったことまでは十分に可視化されてはいないが、そのことが確認されたことは今回の大きな成果であったと考えている。

「いい川」は、「いい川づくり」のモデルになるとともに、21世紀に引き継ぎ残したい川という想いがある。これにもソフト・ハードの2側面があろう。前者は、川と人との関係性の濃密な川であり、愛され川が喜んでいる川である。言い換えれば、市民の活動によっていきいきと輝く川になっている川である。人によって演出されたい川とも言えようか。その面ではどぶ川でも十分に資格がある。今回もこの面からの応募が多かったようである。

後者での「いい川」も忘れてはならないであろう。市民の活動はそれほどではないが、「いい川づくり」のハード面のモデルともなるような「いい川」は厳としてあるように思う。それは必ずしも流域人口が少なく自然度の高い原生河川だけではない。原生林と雑木林との関係と同じように田園の川、里の川も「いい川」の範疇に入ろう。メダカが泳ぎ、羽黒トンボの舞うような川といってもよいであろう。そういう川をもっと発掘したい。

それにしても交流会で新潟から差し入れのあったメダカ佃煮の味は忘れられない。ともあれ私自身ずいぶん勉強になりました。来年もよろしく願います。

「川の日」ワークショップ実行委員長

森 清和（全国水環境交流会代表幹事）